

富山県周辺における風祭と風鎌について

田上 善夫

“Kazamatsuri” and “Kazakama” around Toyama Prefecture

Yoshio TAGAMI

e-mail: tagami@edu.toyama-u.ac.jp

Abstract

“Kazamatsuri”, a kind of wind festival or a ceremony to pray gods to appease the storm, have come down around Toyama Prefecture in Japan. It is held mainly on the foot of mountains and also on the plains. There are festivals similar to “Kazamatsuri” all over Japan and people pray their wind gods to appease the strong winds. Especially in Yamagata prefecture, Shin-etsu area, Izu peninsula, Fukui prefecture, Nara prefecture and around Suonada, many wind festivals have come down until today. The festival days are concentrated on middle of August and early September. Wind festivals have been related to the wind gods and their shrines, and also even controlled by the local government. It may be estimated that the style and prayer of wind festival has been changed from the early days.

キーワード: 富山, 風, 祭, 神社, 神, 鎌

Key words: Toyama, Wind, Festival, Shrine, God, Sickle

I はじめに

「風祭」の名は、すでに日本書紀中の7世紀の天武朝にみえる。万葉集にも、「峯の上の桜の花は滝の瀬ゆ落ちて流る君が見む、その日までには山おろしの風な吹きそとうち越えて、名に負へる杜に風祭せな(巻9 高橋虫麻呂)」とある。近代においても、田口龍雄(1941)の著書『風祭』の冒頭に、田口克敏の調査した富山の風神堂(不吹堂)とその祭りがとりあげられている。おわら古謡にも「二百十日に風さへ吹かには早稲の米食っておわら踊ります」と唄われ、風と祭りのつながりは深い。

富山の井波風、岡山の広戸風や愛媛のやまじ風のような局地的に強風の吹く地域には風の宮がみられ、そこで風の祭祀が行われている(田上善夫, 2000)。風祭は雨乞などと同様天候に深く関わり、風神祭あるいは風鎮祭などとして、風の災厄を免れ豊作となるように祈願される。

局地的強風地域で鎮風祈願が行われる一方で、風祭の行われている地域において強風が吹きやすいというわけではない。風宮はさらに、昭和47年の神社明細帳では、静岡34、愛知31、岐阜22、三重10、滋賀19、福井18、富山9、群馬52が数えられるという(関口 武, 1985)。全国各地に伝わるさまざまな風宮や風祭は、静岡県ではその東部に多く(吉野正敏, 1999)、日本海西部の島嶼部にもみられ(谷治正孝, 1999)、分布は強風地域と必ずしも対応しない。

風祭はまた、祭祀の形態がさまざまである。風祭は、社祠を持たなくても集落の行事として行われている。古来、風鎮めなどは農耕に普遍的な祈願であれば、各地で自然発生的に行われうる。しかし、社会的な背景のもとで風祭の行われる地に祭神を比定し社祠をおくことにより、風祭は変容してさまざまな形態をとることになる。それが地域の基層文化に即していれば、さまざまな形態が受容されやすい。すなわち風土性に根ざした変容が想定される。

ここではまず富山県とその周辺において、現在行われている風祭について、社祠や祭神、他の祭りとの関係や地域の特色について、現地調査を行う。さらに局地的強風地域でも、風の宮の風祭とは別に、強風のときには風切鎌や鎌立などによる鎮風の祈願が伝えられている。こうした習俗をも含めて、さまざまな風の祭祀の実例を明らかにする。

続いて風祭の名称や分布およびその祭日についての特色を明らかにする。全国で行われている祭りが「平成祭データ」にまとめられている(全国神社祭祀祭礼総合調査本庁委員会, 1995)。これには、神社や祭神などの基礎資料のほか、延べ304,966件の祭りが収録されている(神社本庁教学研究所, 1996)。この調査は平成3年以降に実施されているため、最近まで伝わる風祭について知ることができる。

風祭は古代において記されていても、その初期の姿は推定の域をでない。さらに風祭に限らず、寺社は神仏習合や分離、また合祀などのさまざまな外的要因によっても変容をしてき

た。近世および近代において得られる資料にもとづいて、その変容の実態について明らかにする。さらに富山県周辺の風祭について、全国のものとの関連において検討を加え、風祭の由来や成立の背景についての解明を試みる。

II 富山県周辺にみられる風の祭祀

1. 山麓付近での風祭と不吹堂

多くの風の神は、田や畑、また夏の暑いところに祀られるといわれる。風祭は農耕神事の性格があり、そのためさまざまな風祭は土地の特色と結びつくものと考えられる(図1)。富山県では砺波平野南部をはじめとして各地に不吹堂があり、近世よりそれぞれの地域の行事として風祭が行われてきた実態が明らかにされている(大浦瑞代, 2000)。とりわけ城端町是安の風宮不吹堂での風祭は、寛文二(1662)年の創建の頃から続く盛大なものであった。藩政時代には風祭のときに賭博が開帳されたことから「不吹堂の賭博祭」ともいわれた。また7月15日を「不吹堂」盆と称して、農家では野良仕事を休んで祭りをした(富山新聞社, 1986)。さらに高岡市戸出の字正園野にある川上の風の宮では、享保三(1718)年の二百十日にあたる八月二十二日に、砺波郡の4組により大風厄除けの風鎮祭が行われ、湯の花と各組2升の酒が供えられたという(平凡社地方資料センター, 1994)。

風祭はこうした不吹堂以外でも行われる。平成祭りデータによると、氷見市長坂の長坂神社で8月31日に風神祭が行われる。福野町三清の天満宮では、6月15日に風祭が行われる。この天満宮の本社には菅原道真を祀り、境内の神明宮には豊宇気神が祀られる。氏子総代の方によると、風祭は氏子

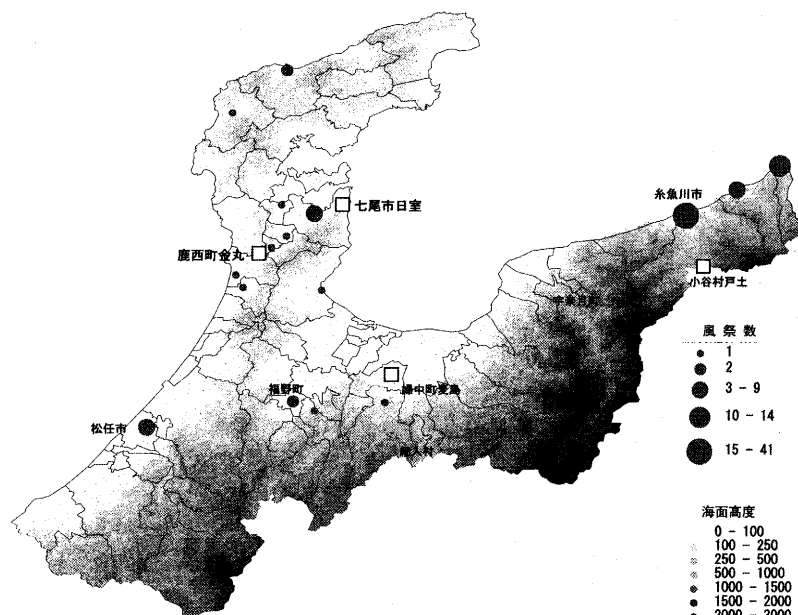


図1 主要な調査対象地域

富山県周辺で風祭の現地調査を実施した範囲を示す。市町村別の風祭の行われている数(円)と、鎌打などの行事が伝えられている地点(四角)の分布には、主として山麓部に集中する傾向がみられる。

90戸のこの部落の祭りであり、区長や営農組合長が出席する。風祭のときには、高瀬神社より神主が迎えらる。

また新川においても、不吹堂と想定されるものを含めて、さまざまな不吹堂がみられる。神通川河岸の細入村檜原から山腹を100m余り登ると小さな平坦面となり、そこに割山の集落がある。標高280m付近の山際に八幡宮が東面して建つ。その境内南側にある小さな番神堂の中には、雛壇のように5段6列に三十番神が並ぶ。三十番神は、延久五年(1073)に僧良正によって選定された、法華経を護持するために勧請された神々で、1ヶ月の30日を日々交替し(長野県立歴史館, 1998)、その中には風の神である諏訪明神も含まれている。番神堂内に掲げられた表額の裏面には、「三十番神/婦寒野/青雲生謹壽」と書かれている。細入村でも上行寺では8月30日に風おさえの祈禱が行われており、表額裏の「婦寒野」は不吹堂の訛りではないかと考えられている(細入村史編纂委員会, 1987)。

前述の城端町是安の風宮不吹堂では、その祭のときには境内の入り口に「風の盆」と掲げられる。八尾町の「おわら風の盆」は、9月1～3日に催される行事である。元禄年間に臨時の祝事として行っためぐり盆が始まりといわれ、後に旧暦七月の盂蘭盆となり、近代に入ってから二百十日の風祭盆となったという。また、風の盆を八尾町大長谷では「フカンドノマツリ」という(太田栄太郎, 1974)。

前述のように、是安では「風宮」と「不吹堂」とは併記され、その近くの菘谷においても「不吹堂」は「風の宮」といわれる(田口克敏, 1967)。また是安の「風祭」には、「風の盆」と掲げられる。この風宮と風祭は神式の呼称であり、不吹堂と風の盆は仏式の呼称である。祀堂あるいは社殿で行われることにより祭祀の様式は異なり、同様に齋行に神官あるいは僧侶があたることによっても様式は大きく異なる。しかし、社祠名や祭名が神仏両用で併記されたり、「風祭盆」、「不吹堂の祭」などの呼称もあること、さらに風宮も不吹堂もなくとも風祭や風の盆の行事があることから、これらは本来の風の祭祀についての、地域による表現の差異を示すものと考えられる。

2. 風祭と山祭などのかかわり

前述の福野町三清の天満宮に隣接する同町森清の神明宮は、ききとりによると共通の神主の持宮であるが、ここでは風祭が行われていない。境内の裏手に小さなお宮があるが、不要のものを納めておくためのもので不吹堂ではないという。風祭は井口村赤祖父の不吹堂まで出向いて行なわれている。部落から一人づつ役員が行き、城国寺の御札をもらって帰る。ここでは7月に虫盆の祭りが村全体でおこなわれる。平成祭りデータではこの森清の神明宮では、

1月18日に風祭が収録されているが、風祭ではなく火伏せ・火祭りであるという。

風の祭祀にはさまざまな呼称があり、また風祭とその他の祭りが兼ねられ同時に行われることがある。平成祭りデータでは、砺波市三合大島の三合神社さんごうじんじやでの2月15日の風祭が収録されているが、一般に風祭の行われる夏季から大きく外れている。富山県では火祭りは多くの場合2月あるいは3月に行われ、その総数は746にのぼる。森滝の神明宮同様に、局地的強風地域の周辺では、類似する主要な祭りの中に風祭が包摂されていく可能性もある。

また富山県内でも砺波や上新川などの山麓部とは異なり、下新川の黒部川流域の山麓部では不吹堂がみられない。ただし宇奈月町中ノ口の石動彦社いするきひこや明日の八幡社あけびなどには、境内入り口に一对の立石が据えられ、大沢野町下伏の不吹堂などと共通の特色がみられる。また入善町では、風の盆が行われる。

むしろ特徴的であるのは、この地域では山祭が行われることである。山祭は平成祭りデータによると、朝日町3、宇奈月町4、黒部市1があり、富山県内の総数16のうち半分を占める。宇奈月町愛本より上流側の内山八幡宮、音沢八幡社、栗虫八幡社などでのおききとりでは、山祭は2月あるいは3月に行なわれる。およそその1ヶ月後には火祭が行われる。山祭では部落の人たち全員が集まって、お酒と饅頭などが供えられる。祭りの後で、男は25・42・61歳、女は33歳と場合により61歳の厄払いのお祓いをする。この地域ではかつて炭焼きの人たちや猟師の人たちが山に入り、そこで草を刈って山を焼いて雑をし、小豆、粟、黍、蕎麦、大根、蕪などを作っていた。こうした山に入る人達の祭りが山祭である。すなわち、黒部川周辺で砺波や上新川と祭りが異なるのは、山間部と平野部のかかわり方の差異も一因と考えられる。

3. 平野部での風祭と鎮風の習俗

平成祭りデータによれば、石川県では風祭が海岸部にもみられる(図1)。松任市では7社で風祭が行なわれており、それらは中心市街地から北西の海岸部にかけて集中している。相川町の蛭子神社えびす、相川新町の蛭子神社のほか、安田春日神社、平木諏訪神社、徳光八坂神社、竹松住吉神社、郷宮白山神社のようにさまざまな神社にわたっている。祭神も、たけみなかたのかみ 健御名方神、ことしろぬしのみこと 事代主命、くくりひめのみこと 菊理姫命、応神天皇がそれぞれ2社で祭られるほかは、多岐にわたる。

ただし風祭の行われるのは、8月12日が3社、翌13日が4社とこの2日間に限られる。これらの神社のうち蛭子神社は明治初年に、安田春日神社は明治5年に、徳光八坂神社は明治41年に、新たな神を勧請したり周囲の神社と合社している。それらの影響は不明であるが、さまざまな神社や祭神にわたって、ほぼ同じ日において風祭が行われること、またそれが加賀でも松任に集中していることから、地域の風の祭祀としての共通性がうかがわれる。これらの神社分布域に局地的に強風が吹く可能性は不明であるが、風祭が山麓部に限らず海岸部でも普遍的に行われることを示している。

ところで日の定まった風祭のほか、折々の強風時には鎌が用いられることがある。氷見市では、8月27日を御諏訪まつり、鎌まつりといっ、風の盆として踊るところもある(友尾 豊, 1998)。また新湊市海老江の場合、草刈鎌を長い竹竿に取り付け、風の方向に刃先を向けて、手をたたきながら、「ホー、ホー」と大声をあげて家の回りをまわると、風が衰えるとされていた(新湊市教育委員会, 1983)。このように、草刈鎌を竹竿の先につけて風に刃先を向け、手をうってホウホウと唱える風習は、朝日、魚津、滑川、富山、新湊、呉羽、小杉の農村でもみられた(富山県, 1973)。

さらに近世末の婦中町では、鎌を神木に打ち込む神事が行われていたことが、文化十二年の「肯構泉達録こうこうせんたつろく」に記されている。すなわち「貞治古の妻は今麦島の神これなり。この神五穀豊熟を守り給い、誓いありて、我を祈りしなば試みに社樹を折くべし。その樹枯れなば誓い空しからんと。これより農民鎌を社樹に打ち込み祈願しけるに靈験あり。今に社樹に数の鎌打ち込みあり。しかれどもその樹枯れずして栄えり」とある(野崎雅明, 1815; 富山県郷土史会, 1974)。また天保十三年頃の「越中旧事記くじき」にも、この麦島村の宮の祭が記されている。すなわち「この村の宮祭礼時すわ神社内に檜木の古木ありて、祭礼の日宿願の人この木に草刈鎌打ち込むと云う。今もその木に数本の鎌打ち込みあり。百を以てて数うべし。後はこの鎌の肉に包まれて中心斗見ゆるもあまたあり。その鎌を打つ時見たる人なし。いつの間に打つとも知れず、またその木活生少しもかわることなし」とある(作者不詳, 1842頃; 富山郷土研究会, 1932)。

上記より鎌打の主な目的は、豊作祈願にあることがわかる。この麦島の宮は現在の婦中町速星麦島にある諏訪神社と考えられる。この神社の宮人総代の方によれば、先年婦中町史作成のため神主さんと調べた際には、神社には鎌は見当たらなかったという。そのため、どのような鎌が用いられていたのか不明である。現在は水神社を合祀している。境内入り口には、一对の立石が並べられている。こうした立石は、城端町是安、八尾掛畑、大沢野町下伏の各不吹堂にみられるほか、中新川、下新川また氷見にもみられる。

また富山市秋ヶ島には、風宮石がある(富山新聞社, 1986)(図2)。婦中町とは神通川をはさんで東方にあたり、いづれも山麓から離れた平野の中心部にある。この大日八幡宮には諏訪社も合祀されている。現在、7月27日に諏訪祭があるが、風の祭祀は行われていないという。

4. 神木への鎌打と鎮風祈願

婦中町麦島でかつて行われた鎌打は、現在の能登に伝わるものに類すると考えられる。まず鹿西町金丸の鎌宮諏訪神社は、邑知瀨平野南西部の丘陵南側斜面にある。その境内の中央にある神木には、祭礼のときに打たれた多数の鎌がみられる(図3)。この鎌はこの地で健御名方命が弥柄鎌の敏鎌で草を刈り払ったことに由来し、辰巻除鎌あるいは日足鎌ひたりかま、比足鎌とも呼ばれる(小倉 学, 1991)。すなわち竜巻を避け、虫害を除き、豊作を祈るために行われ、祭りは風鎮め大祭と

呼ばれた。ただし現在打たれている鎌は小さく、草の刈り払いに用いる大きな鎌ではない。

金丸の鎌打ち神事すなわち風祭は、婦中町麦島の場合よりも少し前の、安永六(1777)年の「能登名跡志」にみられるという(小倉学, 1991)。能登半島には風祭が多く、平成祭りデータでは鹿島郡は8、七尾市は7を数え、白山神社、八幡神社、日吉神社などさまざまな神社で行われている(図1)。ただし、金丸の鎌宮諏訪神社はやや特異であり、明治期に隣地区にある郷社の宿那彦神像石神社に合併された。大戦後も宗教法人とならないが現実には地区の産土神として祭祀が続けられている(小倉学, 1991)。

もともと諏訪神はスワノモリに祀られ、神木あるいは神石があっても社殿はないものが多い。そのため明治以降には無格社となる一方で、神社制度の有形無形の影響から外れて、藩政期あるいはそれ以前の特異な祭祀形態が存続したものと考えられる。

能登半島では金丸のほかでも、鎌打が現在も行われている。七尾市江泊町日室の諏訪神社は、富山湾側から谷を分水界近くまで遡行し、その北側斜面頂部の小平坦地に、樹叢に埋もれるようにして鎮座している(図1)。ききとりによれば、鎌は8月26日に七尾市街の大地主神社で入魂され、日室の「あけ屋敷」に奉安される。8月27日に日室の集落で祭りをす。明治以降には神職が行なうようになり、白鳥の宮司が来られるという。祭りでは湯釜の神事の形式が残り、すすきが柵として用いられてきた。湯のしぶきで風を鎮めるといわれ、東西南北の四方が鎮められる。

神木のタブに打たれた鎌は、目や口を打ち出して魚を表しているが、海が近いためといわれる。風波を鎮めて安全と豊漁を祈願する漁村の習わしが伝わったことが考えられる。金丸にくらべて鎌の数が少ないのは、祭りをする部落の規模が異なるためであろう(図4)。日室は宝達丘陵最北部の山間部に位置しており、金丸が邑知瀧平野の山麓部、すなわちかつての邑知瀧の水辺に位置していたのとは地勢が大きく異なっている。

この諏訪神社も明治初年には無格社に列したが、戦後には社殿を建立して宗教法人への切り替えが認められた(小倉学, 1991)。金丸と異なり合祀されなかったため、小規模ながらその後の社殿をもつに至っている。ただし村人のほかからは、ほとんど隔絶された位置にある。

これら金丸と日室のほかにも、鹿島町藤井の諏訪神社を明治四十年に併合した住吉神社でも、境内のタブの木に鎌が打ち込まれている(小倉学, 1991)。また氷見の中田でもあり、石動山の近くで行われていたという。さらに鹿島郡鹿西町能登部上の諏訪神社、鳳至郡穴水町前波の一本木諏訪神社、珠洲郡内浦町白丸の諏訪神社では、鎌を神体としている(小倉学, 1991)。すなわちこうした鎌は、邑知瀧平野周辺および半島東岸部に多く伝わる。鎌は金丸では瀧の開拓神と結びつけられ、日室では魚が象徴的に描かれるが、いずれも風を鎮め、さらに豊作・豊漁を祈願している。

5. 内鎌と境界

新潟県西部を流れる姫川の右岸側の支流である根知川を遡った、標高550m付近に位置するのが、戸土の部落である。残雪が遅くまで残る地域である。戸土は糸魚川市と長野県小谷村の境に当たっており、分水界を越えて北側にあるが、南側の小谷村に属している。少し上った白池にキャンプ場があり、観光開発が進行中である。ギフチョウの生息地であり、信州への塩の道が通り、鎌宮があるなど観光資源が多い。幅5mの道路をつけ、神社も新しく立て替えるなどの計画が立てられているという。

戸土は現在の車道の終点にあたり、そこから東向き斜面を数十m上った標高590m付近の小さな平坦地に境宮諏訪神社がある。神社の前方、根治川の谷を見下ろす平坦地の縁に杉の巨木がある。根元から2.5m位のところに、高さ1mにわたって計5つの鎌が打ちつけられている。鎌は能登のものは刃が樹幹に垂直に立てられていたのに対して、平行な方向にある。形状はかなり様式化されており、鶏冠をつけたニワトリの頭部のように見える。鶏冠状のギザギザを内側に向けるもの3つ、外に向けるもの2つがある(図5)。鎌の形態は胎児を模しているともいわれる。

ききとりによれば、新潟と長野の県境では、この戸土と中股の明神で鎌がみられる。中股は、戸土から山腹に沿って東に30分ほど歩いたところである。現在砂防ダムがある付近の中俣沢右岸の小高い岩の上にある。戸土と中股では交互に7年毎に、すなわち諏訪神社の寅・申の式年の前年に、交互に鎌を打ち込む祭りがあり、そのときには50人くらいが集まるといふ。鎌には諏訪神社で最高位の宮司さんが銘を彫る。鎌は75年前のものが残るが、時がたつにつれ樹幹にだんだん深く埋もれていく。

戸土の祝詞に「…七歳に一度の国境見として、みしるしの利鎌に貴の幣帛とりそえて…」とあり、鋭鎌とも表記される(近藤信義, 1997)。能登での開拓神の言い伝えとは異なり、諏訪神の「みしるし」として象徴化されており、形状からも性格は異なるように考えられる。なお戸土でも、この鎌を元禄年間には「内鎌」と記し、諏訪からくるものは「薙鎌」とされている(稲田泰策, 1962)。そのため諏訪神社神体の「薙鎌」とはまた異なる、地域固有のものが存在していた可能性がある。

III 現在行われている風祭とその伝承の基盤

1. 風祭の名称からみた祈願の内容

風の祭祀は、富山県周辺だけでも「風の盆」や中には「鎌祭」のようなさまざまな呼称がある。祭祀の形態は地域によりそれぞれ異なるが、風鎮めを祈願することが共通する。農業また漁業においても、風害を避けることは普遍的な関心事のため風祭は各地で行われており、そうした中に風祭を成立させ存続させる由縁が示されるものと考えられる。祭りの正式名称ないしは通称が「風」に関連しているものは、多くの場合には風の祭祀を示すものと考えられることができる。そのた



図2 平野部にみられる風宮石

富山空港の東に位置する富山市秋ヶ島の大日八幡宮にある。同社には諏訪社も合祀されている。この石は長野県に多い道祖神と同種のものといわれる。



図3 神木に打たれた鎌

石川県鹿島郡鹿西町金丸の鎌宮諏訪神社にある。同社は社殿がなく、境内中央に一段高く設けられた神域のタブの木に、毎年8月27日に日足鎌と呼ばれる鎌が打たれる。



図4 魚の絵の彫られた鎌

石川県七尾市江泊町日室の諏訪神社にある。毎年8月27日に風鎮祭が行われ、神木のタブの木に神鎌が打ち込まれる。

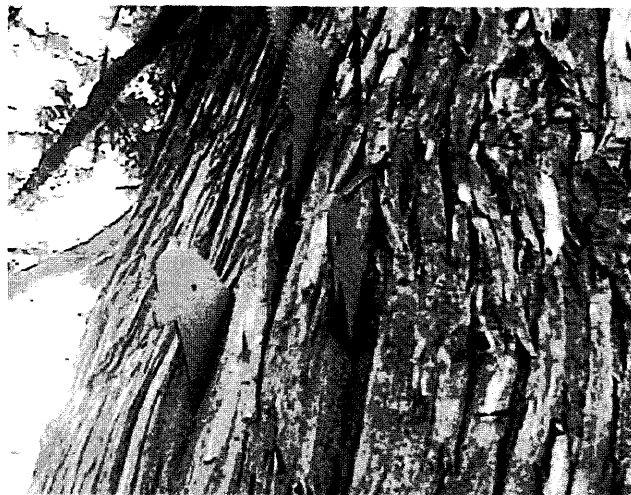


図5 信越国境の内鎌

長野県北安曇郡小谷村戸土の諏訪神社にある。分水界を越えて越後側に入ったところにあり、鶏冠状にも見える特異な形状の鎌が12年ごとに神木の杉に打たれる。

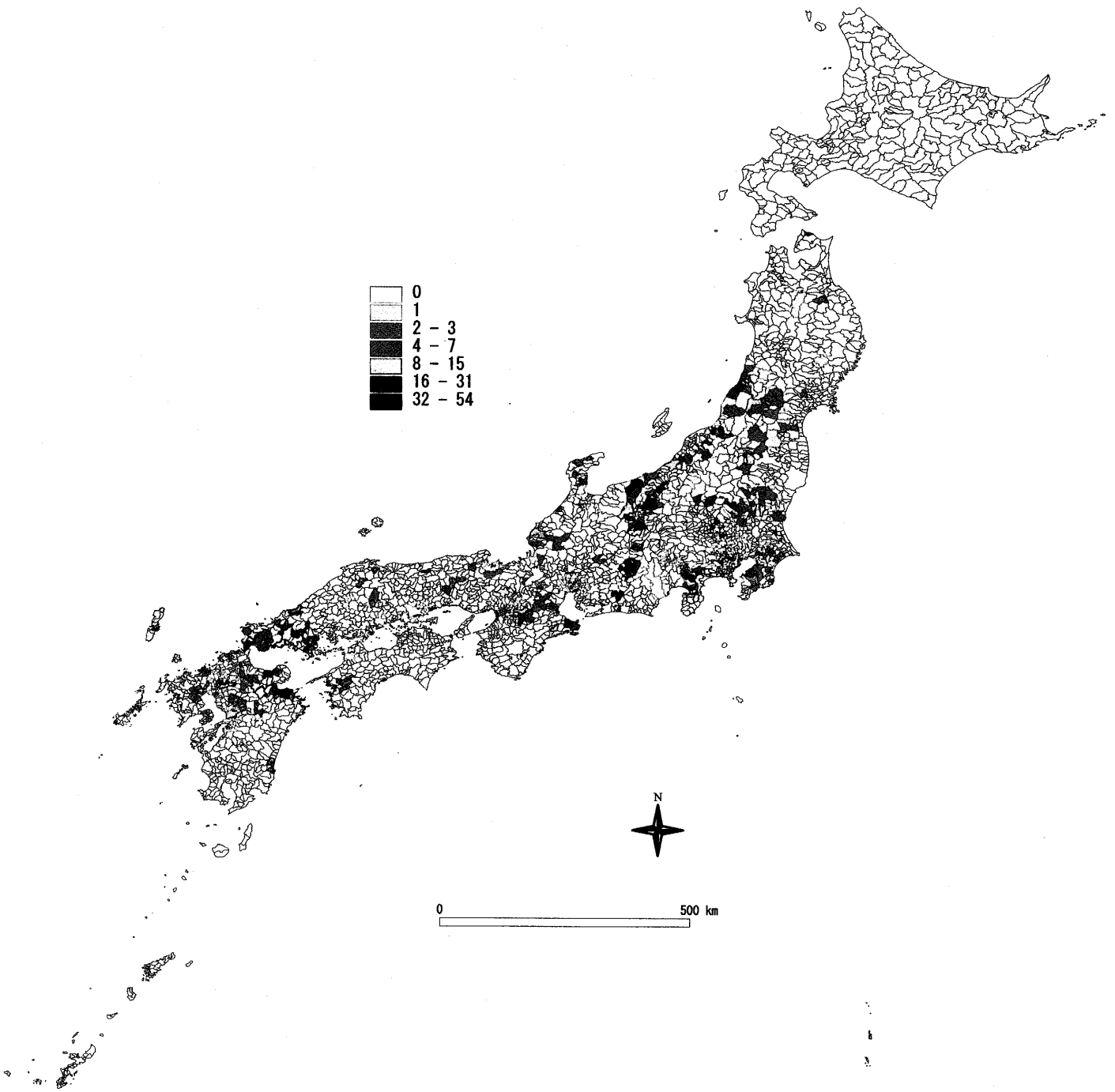


図6 風祭が行われている地域

さまざまな呼称の風祭について、区市町村別の総数で示す。分布は全国にわたるが、一方でいくつかの地域に偏在している。平成祭りデータより集計。

表1 風祭の名称とその数

風鎮めなどの祭祀にはさまざまな呼称があるが、類似するものが認められる。類似の名称ごとの合計数とその内訳で示す。平成祭りデータより集計。

風祭	828	風鎮祭	480	風除祭	297	風神祭	290	風止祭	149	風日祭	115	風願祭	64
風祭	585	風鎮祭	429	除風祭	123	風神祭	279	風止祭	53	風日祈祭	84	風願濟祭	49
風祭り	190	鎮風祭	24	風除祭	110	風神祭・秋葉祭	3	風止め	18	風日祭	14	風願成就	5
風まつり	34	風鎮め	6	風除け	15	風神例祭	2	厄神並風神風止祭	16	風日	6	風水青願明神事	5
秋祭・風祭	2	風鎮のまつり	3	風除報賽祭	14	他の風神祭	6	風止	12	風日前夜祭	2	風治祭	3
大祓・風祭	2	風鎮報賽祭	3	風除祈願祭	7			風止願成就	9	他の風日祭	9	他の風願祭	2
風祭祭	2	風鎮御礼祭	2	風除祈禱祭	7			風止めまつり	7				
他の風祭	13	他の風鎮祭	13	風除願成就祭	3			風止願成就祭	7				
				風除	2			風止祈願祭	6				
				風除け祭り	2			風止め祭り	3				
				風除さん	2			天満宮風止祭	2				
				風除神事	2			風止め祭	2				
				他の風除祭	10			風止祭り	2				
								他の風止祭	12				
風祈禱祭	62	虫除風鎮祭	28	風箏	22	風神社祭	19	二百十日風祭	13	台風除	8	風流	8
風祈禱祭	20	虫除風鎮祭	5	風箏祭	5	風神社祭	6	二百十日風祭	6	台風除	3	風流	2
風祈禱	16	除蝗風祭	3	風止	4	風宮神社例祭	3	二百十日風祭	3	台風除祈願	2	風流杖踊り	2
風祈祭	13	除蝗風鎮祭	3	風ごもり	2	他の風神社祭	10	他の二百十日風祭	5	他の台風除	3	他の風流	4
風の祈禱祭	5	虫風祭	3	風除ごもり	2								
風ぬきとう	2	虫風祈禱祭	2	風箏り	2								
風祈念祭	2	他の虫除風祭	12	他の風箏	7								
他の風祈禱祭	4												

めまず名称に「風」が含まれているものを、平成祭りデータより抽出する。

その結果、こうした風祭は、総数で2457件、名称は212通りにおよぶ。名称が多岐にわたるのは、表記が異なったり地域名が冠されたりするためである。それらは名称の上で同種のものに含めると、いくつかの類型にまとめることができる。(表1)。

風の祭祀において、最も多く用いられる呼称は「風祭」である。さらに「風神祭」は祭神を、「風神社祭」は社祠を名称に加えたものであり「風祭」の異称と考えられる。これらは、風の祭祀を簡潔に示す一般的なもので、全国的に広くみられる。

祭りの祈願の内容を名称に含めているのが、「風鎮祭」、「風除祭」、「風止祭」であり、いずれにしても風鎮めで共通している。「風願祭」、「風祈禱祭」および「風日祭」においても、風や天候が順調であることが祈願の内容と考えられる。なお「風日祭」には「風避祭」が含まれているかもしれない。

また「虫除風祭」では、本来の風祭の以外の名が含まれている。この名称は複数の祭りが合体したことを示しているが、風祭が時期や対象などが虫除や虫送りなどと類縁にあることを示すものと考えられる。

こうした風祭の名称には地域性がみられる。たとえば、三重県では「除風祭」の名称が卓越している。また「風願濟祭」は、奈良県で使われている名称である。こうした地域的に固有な呼称は近畿地方に多くみられる。同様に九州方面でも、地域により特定の名称を用いる場合が多い。類似した風鎮の呼称であっても、福岡県と熊本県では「風止祭」が多く、大分県と長崎県では「風除祭」が多く、山口県では「風鎮祭」が多い。

このように名称から風の祭祀をみると、そのほとんどの場合で風鎮を祈願していることが明らかである。なお「風」が名称に含まれていなくても、「かままつり」や「二百十日祭」などは、祈願には風鎮めがあると思われる。さらに寺院が祭

祀を執行したり、地域住民だけで行われる風祭もある。これらはもともと平成祭りデータには含まれないため、風祭の名称はさらに多岐にわたっている。

2. 風祭の行われている地域

風祭は各地のものが知られているが、前節での風祭の総数はそれらをはるかに上回っており、従来の風祭の知見は個別的事例に過ぎず、風祭の一端を示すにとどまる可能性が高い。風祭は富山県周辺でも富山県南部の山麓部などや能登半島などに多く、現在では地域的に偏在している。こうした偏在のようすに、風祭のもつ特色が示されるものと考えられる。現在に伝わる風祭の地域的な分布を、平成祭りデータより集計してその総数で示すことにする。海岸付近と内陸方面では異なるために、区市町村別の合計数を階級に分けて、分布を表示する(図6)。

風祭は全国にわたってみられるが、およそ、山形、信越、伊豆、福井、伊勢・奈良、周防灘周辺などの県や地域に集中するようすが認められる。大都市圏には少なくなるが、東京でも世田谷区や武蔵野市、八王子市など西方の三多摩寄りでは行われており、房総半島にも多彩な呼称の風祭がある。なお世田谷区でも、祭りに鎌が使われるという。

一方、風祭は北海道および東北地方北部では少なく、また中国・四国地方にも少ない。とりわけ南海道すなわち近畿・四国・九州の太平洋岸は、台風の上陸することが頻繁な地域であるにもかかわらず風祭は少ない。

風祭は局地的強風地域にみられるように、風害の発生しやすい地域と深い結びつきがある。風害を避けるための祈願から、風祭が自然的に発生することは十分考えられることである。ただし祭礼は時代とともに変容し、風祭も現在に必ずしも伝わるわけではない。土佐藩ではその憲章簿「官掟之部」によると、寛政十一(1799)年六月に、「神事祭礼のときやまた作物虫送・風祭などといって、芝居などをして見物人を集めて浪費させているが、このような者たちを村々に立ち入れ

させてはならない」との触れが出された(高知県, 1977)。このような制限が加えられていくことにより、風害の多い地域といえども、風祭の伝承の道が閉ざされたことも考えられる。一方前述の能登半島では、例外的な場合に鎌打が存続した。房総半島や伊豆半島、また志摩半島などの半島部に風祭が多く残ることに、伝播の経路からそれた位置にあって独自の伝承が可能であったことも考えられる。

3. 風祭のおこなわれる日

風の宮総本宮とされる龍田大社では、現在7月第1日曜日に風鎮大祭が行われ、伊勢の神宮では風日祈宮で5月14日と8月4日に風日祈祭が行われている。祭りの行われる日は祭りの由来にもとづいており、祭日には各地における風祭の由来の一端が示されている。

風祭が行われる日についてそのおおよその傾向を知るために、都道府県別に月別に集計する。その結果、風祭は現在では「夏祭り」であることが大半であり、奈良県、長野県、新潟県、山口県、山形県、三重県など多数のところでは8月に開催数が最も多くなる。開催期間は稲の生育期間でもあることは、風祭は豊作祈願や豊作予祝など農耕にまつわる祭りであることを示している。

風祭の多い県について、さらに旬別の風祭の開催数を示すと、およそ8月中旬から9月上旬にそれぞれのピークがある(図7)。新潟県は8月中旬、長野県と山形県は8月下旬、福岡県は9月上旬に多い。ただし大分県では早く7月下旬である。このことは、風祭には稲の生育のみならず、各地に伝わる風習などが大きく影響していることを示している。とくに隣接する長野県と新潟県でピークとなる旬が異なることは、両県の風祭の性格が異なることを示唆している。

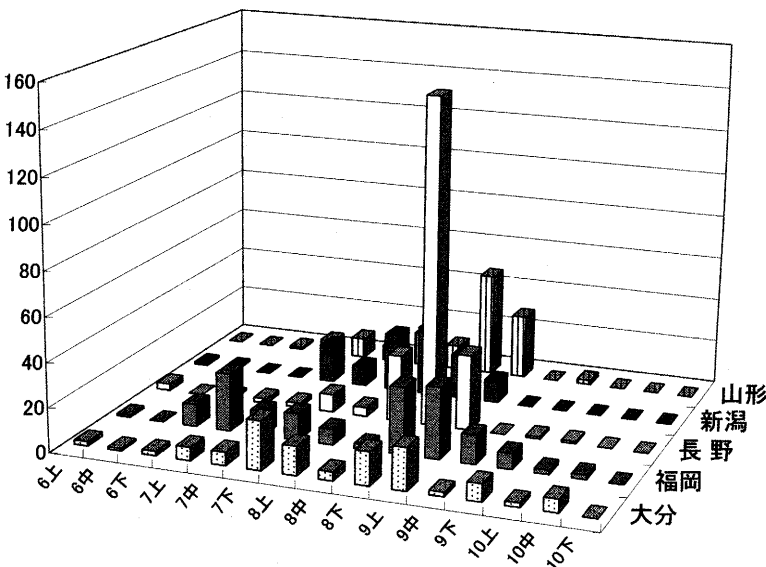


図7 風祭の行われる日

風祭の行われる主な県について、旬別の祭日の数で示す。山形・新潟・長野および福岡・大分はそれぞれ風祭の分布は連続するが、祭日は異なっている。平成祭りデータより集計。

風祭は日別には、新潟県では8月1日、山形県では8月31日、長野県、福岡県、大分県で9月1日にピークが現れる。風祭の名称にも二百十日の名が付く場合がみられた。強風のいわれる二百十日は現在では9月1日であり、このように日別に集計すると、風の祭日のピークとして現れてくる。

また8月1日あるいは9月1日は、同時に八朔の祭日である。諏訪神社上社での御射山社祭は、旧暦7月26日から5日間の御狩神事に続き、8月1日に「馮の神事」という農耕祭が行われる。室町初頭には、御射山祭には大雨風が伴うことが意識されていた(金井典美, 1964; 和歌森太郎, 1942)。旧暦では八朔は年によって変わるが、1841~1870年の30年間について平均すると、9月7日にあたる。すなわち八朔は台風の襲来期であることから、風の災厄を除き豊作の祈願につながるようになった。

そのため諏訪信仰の盛んな地域では、風神の性格の健御名方神を祀るとともに、八朔の祭りを風祭として受容したものと考えられる。しかし「二百十日」が貞享暦より記されるようになると、「八朔」に替わって台風期として知られるようになり、諏訪信仰が衰退したところではむしろ二百十日の祭りに変わっていったとも考えられる。

IV 風祭の由来とその変容

1. 風の神と富山県周辺の祭神

風祭では主に風鎮が祈願されるが、それは風の神に対してなされるものである。ただし風祭の行われる神社は多岐にわたり、さらに風鎮を祈願する祭神は必ずしも特定されない。風神としてよく知られているのは、級長津彦神、健御名方神などである。さらに風のつく神名は多くある(表2)。ただし大方の風祭において、これらが祭神である場合は少数である。風祭の行われる神社の祭神の中に、風鎮の神徳は必ずしもみられない場合も多くある。

この中の風伯とは、中国に由来する。『楚辞 天問篇』中に「女岐無合/夫取九子/伯強何處/惠氣安在」とあり、これは「大母神女岐は配偶者がなかったのに、なぜ九人の子を生んだのか。風神伯強はどこにいるのか。子を孕ませる恵みの風はどこにあるのか」と解釈されている(加納喜光, 1991)。

表2 風になむ神名

現在神社に祭られている神の中から、名称に風を含むものを抽出。平成祭りデータより集計。なお、ほかにも級長津彦命や健御名方命など風神は多い。

アメカゼノカミ 雨風神	カゼヤマツミノミコト 風山津見命	カゼノサボロウ 風之三郎
ハヤチノカミ 疾風神	カゼノカミ 風神	カゼツツケノオシラノカミ 風木津別忍男神
シツペイタロウ 疾風太郎	カゼノオホカミ 風大神	カゼツツケノミコト 風木津別命
ミヅツケカゼノカミ 水別風神	カゼノカミ 風伯	カゼハヤノカミ 風速神
チュウフウノカミ 中風の神	カゼノカミ 風伯神	フウノオホカミ 風野大神
アメノコハカゼノミコト 天剛風命	フウテンシン 風天神	フウノオホカミ 風浪大神

また風天神とは、仏教にちなんでいる。すなわち、風は地水火とともに神格化されて、四執金剛神四大天女とされ、密教十二天の一つや護世八方天の一つにも数えられ、さらに日天や火天とともに三神の一つに数えられている(川口謙二, 1993)。いずれにしても抽象的な名称であり、自然神の性格をもつことを示している。

もともと日本の神は 1) 雷, 虎, 狼, 蛇, 2) 神がかり, 3) 場所に鎮座, 4) 天津神, 国津神, 5) 天皇, 6) 祖先神などに分けられる(山折哲雄, 1990)。風祭における風の神は 1) の雷などと同様の自然神であり、死後に神として祀られたのではないため、本来現世からは隠れていて固有名はつきにくい。このことは日常的な場面において、風の神が以下のように表現されることにも、みることができる。

- a) 「風の神様風おくれ、揚がったらかえすで皆おくれ…」: 滋賀県八日市市での、寛政十二(1800)年頃からの大風揚での歌(八日市市大風啓発資料作成委員会, 1995)。
- b) 「風の神は、けつからしぼのような長いもんをスーと出して子どもらをまたがらせ、ゴーッとひと風吹かせて空へまいあがった」: 新潟県長岡市周辺の山間部での話(水沢謙一, 1980)。
- c) 「どうも風邪が流行って、こう一軒々々、病人がひとりやふたァり寝てねえ家はねえから、ひとつ風の神送りでもして、風の神を追ッ払おうじゃねえか」: 上方落語(林家正蔵, 1974)。

疫病神の意も c) には含まれているが、日常的には風神は固有名で呼ばれるよりも、普通名で呼ぶだけで了解されている。あるいは風祭がおこなわれ、特定の祭神がある場合にも、通常は「風の神」を呼称としていたのかもしれない。

ただし、明治二(1869)年には、神体のない神社に対し新たな神体の勧請が布告され、明治三(1870)年には神名が神道による神号に改められた(稲田道彦, 1994)。こうした過程では、風の神は風神と目される記紀の神々に比定されたことが考えられる。記紀の神々の中で風に深く関わるのが、龍田神社の祭神の級長津彦命・級長戸辺命しなつひのあきこと しなとべのあきこと、および諏訪神社の祭神の健御名方命であり、さらに住吉神社の祭神の墨江三神や八幡宮の祭神の應神天皇などである。この中で級長津彦命は高天原の神-天津神であるのに対して、健御名方命は出雲の神-国津神である。ただし、級長津彦命・級長戸辺命の同神として、天御柱命・国御柱命が称されることがある。健御名方命を祭神とする諏訪神社は独特の祭祀で知られており、風祭にはそうした影響が現れるものと考えられる。

一方、風祭の行われる神社の祭神は、前記以外の神であることも多い。風の神はその普遍的性格ゆえに、特定の神名に比定されることなく隠れていったことも考えられる。風祭の行われる神社に風神が勧請されないならば、風祭はそれまでのその地域の主要な祭神のもとで行われることになる。富山県周辺で祭られている祭神について県別に集計し、主な祭神について県別の相対値で示す(図8)。

その結果、富山をはじめ各県で祭られるのは、天照大神を筆頭に、應神天皇、健御名方神と続く。ただし県により祭神

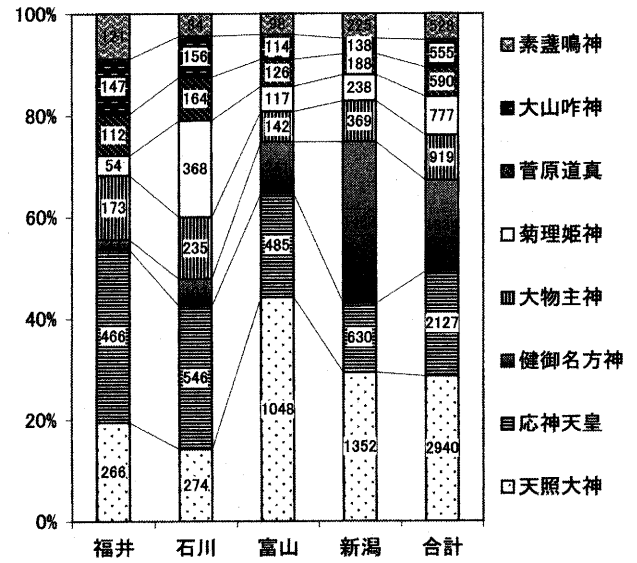


図8 富山県周辺の県別の主な祭神

当該地域における主要な祭神について、相対的な数を示す。祭神には異なる表記のものを含んでいる。また図中の数値は実数である。平成祭りデータより集計。

が大きく異なることがわかる。富山県では天照大神が最多であるのに対し、福井県・石川県では應神天皇、新潟県では健御名方神である。

風祭とこれらの神との結びつきは、今のところ不明である。ただしこれらの神が祭神として比定されるならば、必ずと風祭にも影響をおよぼすものと考えられる。風祭が地方によりさまざまであるのは、本来の地域的な特色に加え、その地域における信仰対象の祭神や社祠に地方色があるためと考えられる。

2. 風の祭祀の場と富山県周辺の神社の変遷

日本では自然物崇拝からはじまり、「タマ(霊・魂)」は「カミ」となり、さらに「神」へと顕在化してきたため、もともとは社殿のような人工的な建造物は必要とされなかった(稲田道彦, 1994)。不吹堂の祭や神木への鎌打など、社殿の無いところでも行われる風祭は、風の神の自然神的な性格を示している。また不吹堂は砺波平野南部から上新川にかけての山麓部に分布するが、「風」に関する地名も山沿い地域に多く(中葉博文, 1992)、市町村別には宇奈月1, 上市8, 立山4, 大山3, 大沢野2, 八尾9, 井波4, 福光4の風地名がある。地名には人々による土地の自然の認知が反映されるので、本来自然神を祭る風祭の分布と対応することが考えられる。

しかし先述のように、風祭は7世紀の天武朝において龍田大社などで行われており、民間の行事にとどまるわけではない。多くの著名な神社においても風祭が行われていることは、風祭のもつ多面的な性格を示している。また福野町でのように、隣接する部落同士で風祭の行われる場所が遠く離れることがある。風祭と現在の祭神が本来は結びつかない場合が考えられるが、風祭と現在それが行われている神社との関係も、

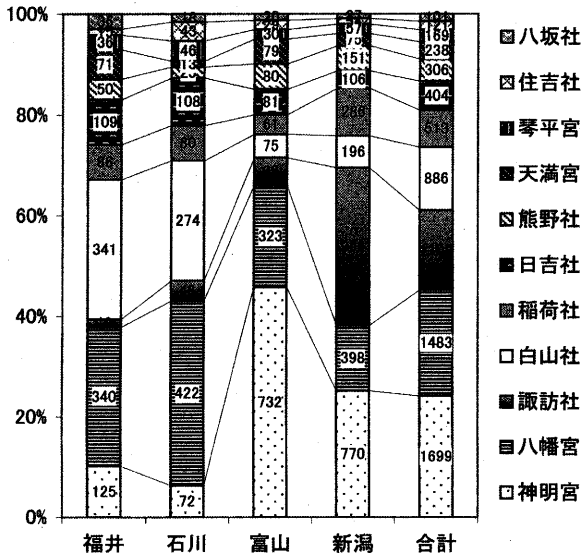


図9 富山県周辺の県別の主な神社

主要な神社について相対的な数を示す。各県の神社総数に対して、この11社は福井70.0%、石川60.0%、富山73.9%、新潟63.8%を占める。平成祭りデータより集計。

本来のものから変わってきたものと考えられる。

たとえば祭りと神社との関係、祇園祭と八坂神社にみる事ができる。もともと八坂神社は9世紀後半～11世紀初頭にかけて祇園社として創祀され、明治の神仏分離後に改称された。祇園祭は神霊の神輿渡御の形式をもち、江戸の山王祭や神田祭に大きな影響を与えたという(茂木貞純, 1998)。さらに山王祭や神田祭は江戸周辺へも影響が大きく、八坂神社が境内社として関東に多いことにつながるとみられている。

祭りと神社との関係から、風祭が社殿をもたないかあるいは小規模な社殿で行われていた場合、異なる神社への合祀や新たな社殿が創建される中では、それぞれの県における神社事情が風祭に大きな影響を与えたと考えられる。富山県周辺について、県別の主要な神社数を同系統の神社を含めて集計する(図9)。

その結果、全体では、神明宮、八幡宮、諏訪社、白山社の順に多い。最も多いのは富山県では神明宮であるが、石川県では八幡宮であり、福井県では白山社が多く、新潟県では諏訪社が圧倒的である。新潟県で風祭が多いことは、この諏訪社が多いことと結びつくものと考えられる。

先述のように明治期や大戦後に神社制度の大きな変化があった。さらに藩政期にも、水戸藩では1郷に1社とし、岡山藩では10,000社を破棄して氏神601社とした(千秋謙治, 2000)。加賀藩では寺と一揆門徒を統制するために、有力寺社に対し禁制を下付して寺から武力を切り離し、かつ寺社領を寄進したり安堵ならびに特権を付与して懐柔した。婦負郡では天正十八(1590)年をはじめとし、寛永十三(1636)年、慶安元年(1648)などに寺社改めが行われ、拝領地の検地を行ったり寄進状を更新して寺社を支配した。これは隠田摘発の意図を含み、加賀藩の農政と密接に関連した(婦中町史編纂委員会, 1996)。

こうした寺社政策の影響が考えられるが、富山と石川における藩政期の各神社の数は、加越能寺社由来から知ることができる(金沢大学法文学部日本海文化研究室, 1974, 1975)。それより、社号ごとの数を図示する(図10)。

藩政期における神社には、観音や薬師のような仏教と習合したものも含まれている。それらを含めても富山では、現在と同様に神明社が最も多く、八幡社や諏訪社などが続く。また富山では正徳二(1712)年および寛政八(1796)年の砺波郡および射水郡における神社が明らかにされている。社号を神明や八幡など名社、観音や薬師など仏教などの習合、高瀬のように地域的なものに大別すると、それぞれの割合は両期でおよそ同様である。加賀藩では社祠の統廃合を行なわなかったため、砺波地方では氏子の範囲が変動した比率は少

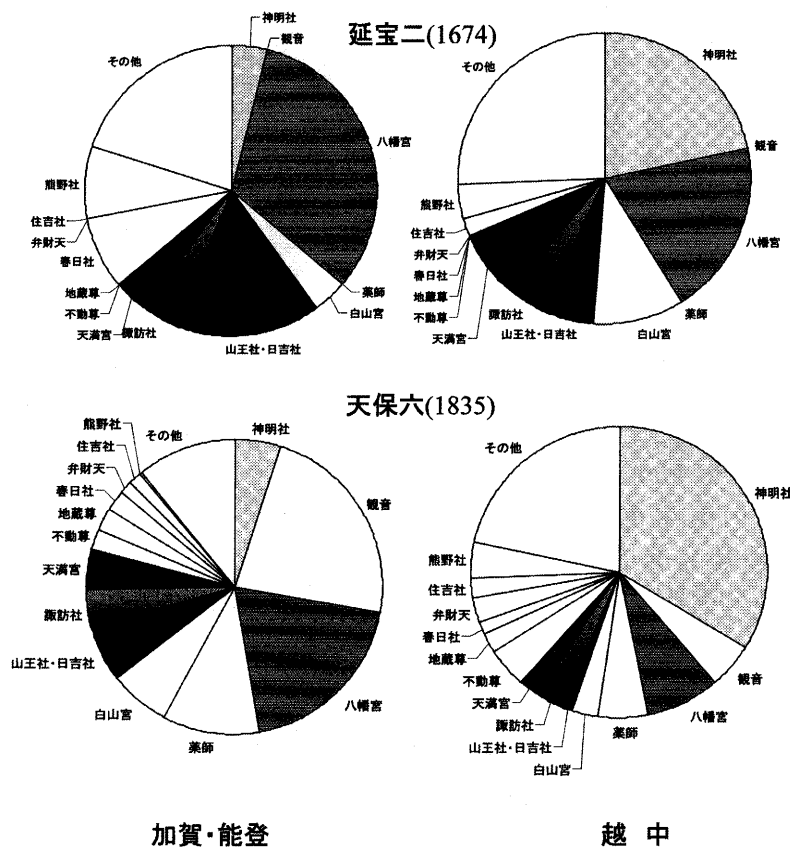


図10 藩政期における社祠とその変化

富山と石川について、17世紀、19世紀の神社の相対数を示す。仏教と習合したものも含めている。「加越能寺社由来」中の各神号帳による。社祠の総数は延宝二年には加賀・能登25、越中51、天保六年には加賀・能登296、越中184である。

ないといわれる(千秋謙治, 2000)。また砺波郡では射水郡と比べても寺院系の神社が多いことは、風宮でなく不吹堂と呼ばれることが多いことに結びつくかもしれない。

さらに加賀藩の神社政策以前において、富山県の地域による文化的変容の差異への浄土真宗とのかかわりがいわれている。すなわち富山県に残る民俗が一般に少ないのは、浄土真宗が迷信として否定したことによるといわれる。ただし呉西やまた呉東でも大沢野や細入に多く残るのは、修験や真宗以外の宗派、また飛騨との交流などがかわることによる(太田栄太郎, 1974)。砺波平野南部の不吹堂でも、寺院系の風祭でもそれを執り行うのは浄土真宗以外の僧侶であり、その他の地域においても浄土真宗が風祭にも影響したことも考えられる。

3. 風祭と諏訪の風神とのかかわり

現在風祭についてさまざまな祭神と神社が比定されるにせよ、前述のように風の神が自然神的性格で社殿も必ずしも必要としない場合がみられた。日本書紀中で信濃須波・水内の神は竜田風神とともに祭られた風神とされるが、須波は諏訪明神、水内は上水内郡の健御名方富命彦神別神社たけみなかたとみのみことひこみわけじんじにあたる(岡田米夫, 1975)。また諏訪神社には拝殿後方に御神体の木や山があって本殿の無い様式であり、スワノモリに祀られるのみのことも多い。こうしたことから、諏訪神社と風祭とはとくに深い結びつきがあることが考えられる。この諏訪神社の数を、平成祭りデータから市町村別に集計し、分布に示す(図11)。分布は長野県、新潟県に集中しており、この地域においては風祭の分布(図6)とよく対応している。

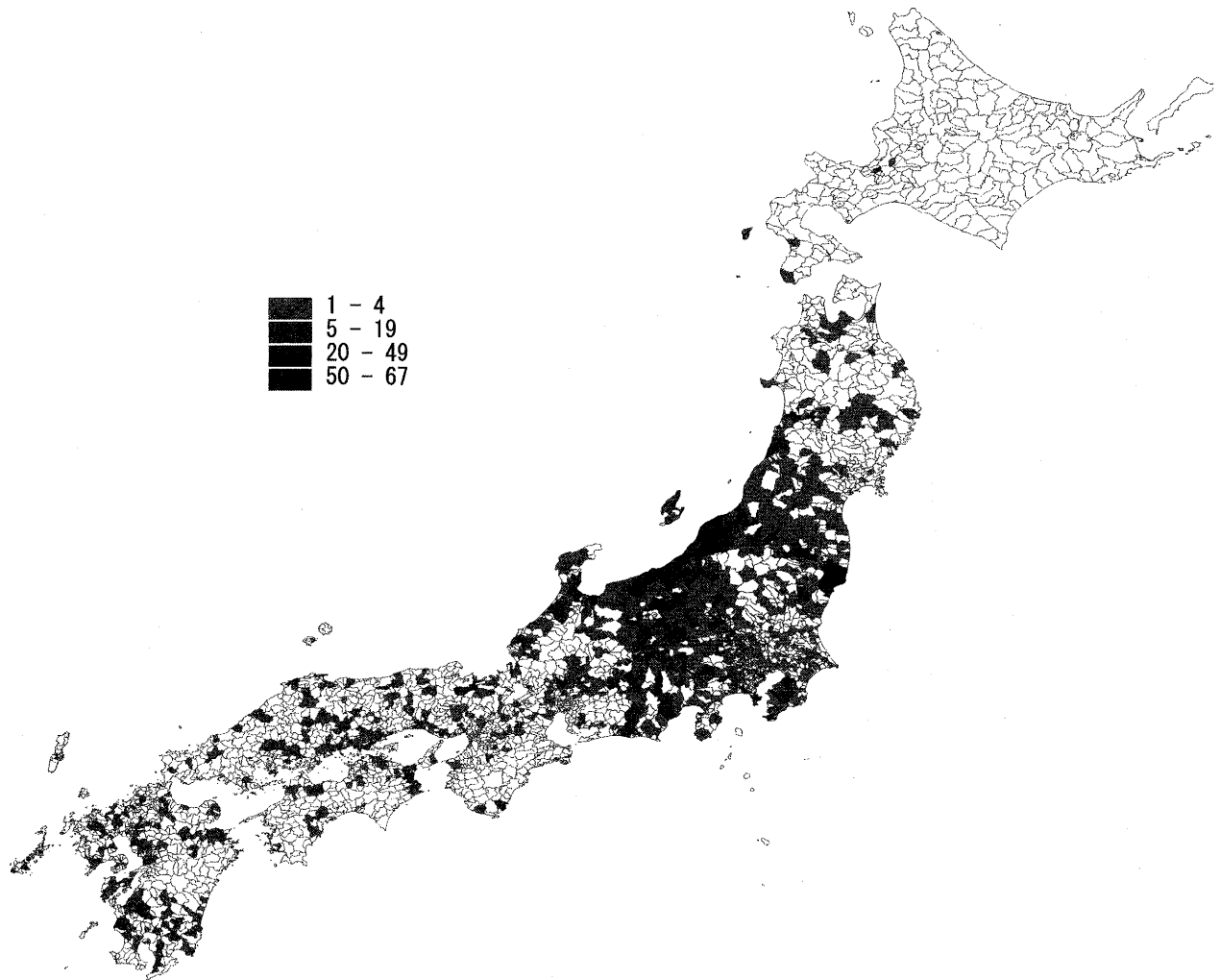


図11 諏訪神社の分布

地域の名が冠せられたものなども含め、諏訪神社の区市町村別の総数で示す。分布には特定地域に集中するようすが現れている。平成祭りデータより集計。

ここで、諏訪の神あるいは諏訪大社の祭神の健御名方神が風神と認識されるのは、何に由来するのであろうか。先代旧事本紀によれば、健御名方神は須佐之男命の六世の孫である大国主神と、糸魚川市田伏の奴奈川神社に祀られている「高志の沼河姫」の間に生まれた(岡田米夫, 1975)。また古事記によれば、健御名方神は大国主神の次男的存在で、長男の事代主命と異なり、天照大神の使者である健雷之男神らの国譲りの要求を拒むが、敗北して科野国洲羽海に逃げたという(川口謙二, 1993)。あるいは伊勢国風土記逸文によると、信濃の諏訪神は伊勢の国の神が風に乗じて移ってきたもので、その伊勢津彦命は「出雲神の子」である(岡田米夫, 1975)。諏訪神社は、諏訪や水内、高志への分布が認められる一方、出雲あるいは伊勢との結びつきは不明である。

ところで、諏訪大社上社と下社の創祀は、周辺に船古墳と狐塚古墳、また青塚古墳が作られた、それぞれ5～6世紀、7～8世紀と考えられている。その頃この地にあった「洩矢神」は中部日本に広く勢力をもっていた(真弓常忠, 1975)。また大宝元年(701)の大宝律では、皇室にまつらぬ者には近流、中流、遠流があり、続日本紀の聖武天皇神亀元年(724)では、諏訪は中流の地とされている。そのためその頃編纂が企画された、風土記および古事記では、国つ神(豪族)は天孫族から地方に追われたという形式が採られたと推定されている(岡田米夫, 1975)。

すなわち諏訪周辺に勢威をふるっていた豪族が中央勢力に組み込まれる中で、須佐之男命～大国主神の系列に比定され、健御名方神の名が冠せられるようになったとみられる。中央に抵抗する勢力であれば、この健御名方神はやがて武神として伝わることになる。同様に、諏訪の神の風神としての性格が、諏訪で風を祀らせ、さらに健御名方神が風神として伝わることになったものと考えられる。ただし風祭の行われる日は、長野県では諏訪神社の祭日と対応するのに対して、新潟県では異なるものであった。そのため風祭と諏訪神社との結びつきは、地域により様ではないことが考えられる。

4. 風の鎌と諏訪神社の薙鎌とのかかわり

能登や信越国境の神木に打ち込まれた鎌は、風祭同様に諏訪神社に結びつく行事である。とりわけ信越国境の鎌は、前述のように特異な形態であり、諏訪神社からもたらされるものであった。

諏訪神社では、7年目ごとの申・寅年に「御柱祭」が行われ、先端が削り落とされた「御柱」が建てられるが、御柱となる木が選定されるときに、上社で「おね鎌打ち」といって目通りのところに打ちこまれるのがこの薙鎌である(真弓常忠, 1975)。薙鎌は古くは奈伊加萬とよばれたが、奈多とおなじであるため、奈岐鎌として鉈鎌と区別された。また薙鎌は、背の羽状の刻み、目をあらわす円孔、嘴の形状など、鳥や龍などの動物の形態から、生贅を表しているともいわれる(桐原 健, 1977)。こうした薙鎌を保有する郷社は、上社勢力圏の諏訪・上伊那ではなく、下社の勢力圏下にあり、下社から御柱の前年に薙鎌が使われて、信越、信遠、信美などの各国境で薙鎌が打たれた(藤森栄一, 1962)。

すなわち、薙鎌は諏訪神社に特徴的な鎌の形式であり、信越国境の戸土での由来の通りであれば、諏訪の勢力範囲を明示するために、国境付近で鎌打ち神事が行われたものである。ただしこれらの鎌は形式が異なることから、諏訪社の式年配布ではなく、各社がそれぞれに行った祭式とみられている(藤森栄一, 1962)。

さらに能登の金丸や日室の諏訪社の鎌の形態が異なることは、こうした鎌が諏訪神社上社下社の薙鎌にとどまらないことを示している。諏訪神社でも薙鎌は室町時代までは上社の祭具の一つに過ぎなかったのを、天正前後の下社再興の中で神秘感の濃厚な薙鎌を風の神信仰または明神蛇体説に結び付けて広めていったが、江戸中期頃まで盛んであった後に急激にさびれていったといわれる(藤森栄一, 1962)。また、法隆寺五重塔の相輪に何本かの鎌が刺されているが、鎌倉時代頃から開拓神としての信仰と結びついて「薙鎌」となったものといわれる(藤森栄一, 1962; 市川健夫, 1999)。すなわち薙鎌の由来は諏訪信仰以前に遡り、各地においてみられたもの

表3 各地にみられる風鎌を用いる風習

強風のときに、鎌を使って風を鎮める祈願が行われる。文献に記載されたものから主要な例を示す。なお御幣を用いるものなども類似の風習として含めている。

地域	鎌の使われ方	出典
新潟県東蒲原郡三川村	鎌の刃先を風上に向ける	吉田郁生, 1986
群馬県吾妻郡嬭恋村田代	古い寄棟の萱葺き屋根の棟には、必ずといってよいほど風切り鎌がつけられている	市川健夫, 1999
神奈川県津久井郡藤野町牧野地方	台風が来そうになると鎌を長い竿の先に結びつけて、民家の庭先に立てて「風は下へほおいほい」と叫ぶ	川口謙二, 1993
静岡県の富士川以西	二百十日頃に、各家の屋根に竿などをたてて風切鎌を結びつける	吉野正敏, 1999
愛知県	二百十日に、ご神木の先に大きな紙袋や御幣をつけて、風除けの梵天とする	谷川健一, 1983
滋賀県甲賀郡	鎌を竿の先につける	朝倉重徳, 1966
岡山県勝田郡	風の吹く日は鎌を竿の先にくくりつけて庭先に立て、風の魔者が通ると切り落とす	広戸風研究班, 1980
愛媛県松山地方	鎌や包丁を竹竿の先につけて風上に向けて立てる	愛媛新聞社, 1985
愛媛県西宇和郡	御幣を高い木の上に立てる	愛媛新聞社, 1985
愛媛県東宇和郡城川町	風に向かって「トウトウ」と大声を発する。二百十日、八朔、盆には、山上で焚火をして風祈禱をする	愛媛新聞社, 1985

と考えられる。

諏訪神社の分布は地域的に限られているのに対して(図11)、鎌立神事は以前にはさらに広がっていた。北野天神の境内末社的那伊鎌神社、紀州伊都郡見好村兄井の鎌八幡宮、福島県安積郡豊田村成田の諏訪明神などにもあり、全てが諏訪から出たものではないとされている(柳田國男, 1931; 桐原 健, 1977)。また甲斐の西方郡部や上野国の山中では大風のときに鎌を竿の先に結び付ける(藤森栄一, 1962)。このように屋根の上や竿のさきに風切鎌をつける風習も、北は宮城県古川から、南は九州の宮崎まであり(桐原 健, 1977)、長野県周辺部に限らず各地に伝わる(表3)。

すなわち鎌に関する風習は各地に見出される。富山県内でも各地に伝承されている風切鎌の風習は、折々の強風の度ごとの風を鎮める祈願であったのに対して、神木への鎌打はこうした風習が日を定めての祭りの神事に変じたとも考えることができる。

V おわりに

風の災厄を免れるよう祈願する風祭は、富山県周辺でも数多く行われている。風祭は山麓付近に多いほか平野部にも分布しており、不吹堂祭りや鎌祭りのような独特の祭祀がある。風神祭、風宮祭、風鎮祭などよばれる風祭が各地で行われており、風鎮めが祈願される。こうした風祭はとくに山形、信越、伊豆、福井、伊勢・奈良、周防灘などの地域に多い。その祭日は夏季に多く、8月中旬から9月上旬に集中している。風祭は祭神や社祠とかかわりつつ、多くの要因が重層しながら今日の分布や形態に至っている。そうした風祭について、その由来や変容は以下のように推察される。

はじめに強風による稲作や漁などへの害に対して、風を鎮めるための祈願が行われたものと考えられる。折々の強風に対して個別に祈願されていたものが、さらに日を定めて豊作や漁の安穩を共同で祈願する、風の祭祀につながるとみられる。風の祭祀はとくに風害の甚大な山麓部の局地的強風地域において多く、さらに平野部や海岸部でも広く行われた。

天武朝では風神が龍田大社に祀られ、風祭は歌にも詠みこまれるようになり、風祭は広く知られていたと考えられる。風祭は風鎮めの祈願であるが、とくに農耕の厄除祈願であった。台風は古来最大の気候災害の一つで稲作の被害も甚大なため、風祭が行われるのは、台風の襲来期である八朔頃が選ばれた。また同日は諏訪神社の祭日でもあるため、諏訪信仰が重層するようになる。二百十日が江戸時代より広く知られるようになると、農村では風祭が二百十日に行われるようになる。

風の神は本来自然神的性格をもつが、さらに祭祀に伴って不吹堂のように風祭のための堂宇が作られていった。集団での祭祀はさらに修験などと結びつき、また例祭が6月18日に行われるように観音信仰とも結びつくなど、地域の多くの要因が風の祭祀に関わっていった。また平野部や海岸部においては、鎌への信仰があるところに諏訪信仰がともない、強風

のときに風鎌をかかげての風鎮祈願が広まった。さらに風祭において鎌打をする神事が行われるようになった。

藩政期にも神社整理があり、明治期にも神社が合併された。富山では風の神として、龍田風神が勧請された。龍田大社で行われた四月の風祭は田植えに先立ち、七月の風祭は収穫に先立つものであった。先の八朔や二百十日よりも時期的に早く、この「風」は、大気現象の風を示すにとどまらず、世界あるいは境界を示しており、霊的な存在を介して豊作を予祝するものであった。富山の山麓部では台風以外にも春に強風が起こりやすく、風祭もこうした時期に行われていたことが級長津彦命の勧請につながったと考えられる。

一方で、風神は自然神ゆえに必ずしも特定の祭神に比定されず、風祭もさまざまな神社に伝わることになった。そこでは風神は顕在化せず隠れるようになる。風祭が各地域に有力な神社に帰属するようになることは、風祭を地域的に変容させることにつながった。もともと諏訪神社の多い地域などで、多くの風祭が伝わった。

さらに風祭は、虫送りなどと同時に行われたり火祭りに吸収されるなど他の祭祀と習合し、地域によっては境界神事の性格もあわせ持つなどその性格を変えていった。そうした風祭の由来と変容には、さまざまな地域的な経緯があると考えられるが、富山県周辺のほかの地域の実態は未調査であり、今後の課題としたい。

謝 辞

松任、鹿西、七尾、福野、細入、婦中、宇奈月、小谷などの現地調査では、多くの地元の方々から貴重な情報を教えていただきました。また市川文彦助教授(現関西学院大学)には一部調査にご同行いただき、香川大学の稲田道彦教授、お茶の水女子大学大学院生の大浦瑞代さんには、神社や祭神、また不吹堂などについて多くのコメントをいただきました。あわせて感謝いたします。

参考文献

- 朝倉重徳(1966): 風祭. 日本民俗学会報, 45, 78-81.
 市川健夫(1999): 風の文化誌. 雄山閣出版, 207p.
 稲田道彦(1994): 阿讃山地の神社とその信仰. 香川県『大滝大川県立自然公園地域の自然と人文景観』1-32, 付表1.
 稲田泰策(1962): 「内鎌」の示す姿の国境—現地報告—. 信濃, 14(10), 663-671.
 愛媛新聞社編(1985): 愛媛県百科大事典(上). 284p.
 大浦瑞代(2000): 富山県南砺地域の不吹堂祭祀にみる局地風の認知. 歴史地理学, 42(1), 29-46.
 太田栄太郎(1974): 日本の民俗16 富山. 301p.
 岡田米夫(1975): 諏訪神の鎮座説話の源流. 神道史研究, 23(5/6), 242-249.
 小倉 学(1991): 能登半島における諏訪信仰—鎌打ち神事を中心として—. 加能民俗研究, 22, 3-30.

- 金井典美(1964)：八朔としての御射山祭－御射山祭の一断面－。諏訪, 6, 35-38.
- 金沢大学法文学部日本海文化研究室編(1974)：加越能寺社由来上巻。石川県図書館協会, 763p.
- 金沢大学法文学部日本海文化研究室編(1975)：加越能寺社由来下巻。石川県図書館協会, 711p.
- 加納喜光(1991)：風の神話学－「天問」女岐章の解釈－。竹田晃先生退官記念学術論文集編集委員会編「竹田晃先生退官記念東アジア文化論叢」汲古書院, 3-15.
- 川口謙二編(1993)：日本神祇由来事典。柏書房, 510+48p.
- 桐原 健(1977)：薙鎌私考。信濃, 29(1), 74-84.
- 高知県(1977)：高知県史 民俗資料編。1337p.
- 近藤信義(1997)：諏訪大社御柱祭の薙鎌について－日室・戸土・金丸の祭事を追って－。立正大学人文科学研究所年報, 別冊第11号, 11-22.
- 作者不詳(1842頃)：越中旧事記。武部文書, 68丁.
- 神社本庁教学研究所(1996)：祭礼データによる著名神社の分布調査。神社本庁教学研究所紀要, 1, 299-311.
- 新湊市教育委員会(1983)：新湊の年中行事。新湊市教育委員会, 117p.
- 関口 武(1985)：風の事典。原書房, 961p.
- 全国神社祭祀祭礼総合調査本庁委員会(1995)：平成「祭」データ。神社本庁.
- 千秋謙治(2000)：砺波地方における近世里修験とその祭祀。砺波散村地域研究所研究紀要, 17, (14)-(26).
- 田上善夫(2000)：富山の不吹堂の風神祭と局地風地域における風の祭祀。富山大学教育学部紀要, 第54号, 1-13.
- 田口克敏(1967)：吹かぬ堂（風神堂）について。富山史壇, 38, 53-55.
- 田口龍雄(1941)：風祭。古今書院, 233p.
- 谷川健一(1983)：星と風をめぐる観念と民俗。谷川健一編『太陽と月－古代人の宇宙観と死生観－』小学館, 197-208.
- 友尾 豊(1998)：風神信仰。富山民俗文化研究グループ編『とやま民俗文化誌』, 194~201.
- 富山郷土研究会編(1932)：越中旧事記・前田氏家乗。中田書店(富山), 163p.
- 富山県(1973)：富山県史民俗編。富山県, 1305p.
- 富山県郷土史会(1974)：肯構泉達録。KNB興産, 502p.
- 富山新聞社(1986)：ふるさとの風と心。富山の習俗。桂書房, 264p.
- 長野県立歴史館(1998)：諏訪信仰の祭りと文化。78p.
- 中葉博文(1998)：北陸地名伝承の研究。五月書房, 474p.
(初出 芸文とやま, 20. 1992)
- 野崎雅明(1815)：肯構泉達録 卷二。野崎本, 1冊.
- 林家正蔵(1974)：林家正蔵集 上巻。青蛙房, 376p.
- 広戸風研究班(1980)：岡山県の局地暴風, 広戸風に関する調査, 研究。211p.
- 藤森栄一(1962)：薙鎌考－諏訪神社の考古学的研究(五)－。信濃, 14(11), 732-743.
- 婦中町史編纂委員会(1996)：婦中町史 通史編。1288p.
- 平凡社地方資料センター編(1994)：富山県の地名。平凡社, 1185p.
- 細入村史編纂委員会(1987)：細入村史。細入村, 1020p.
- 真弓常忠(1975)：諏訪御柱に就いての管見。神道史研究, 23(5/6), 320-337.
- 水沢謙一(1980)：風と神と子どもたち 第1集。新潟日報事業社, 224p.
- 茂木貞純(1998)：素盞鳴尊信仰の展開－神社本庁『平成「祭」データ』の分析を中心に－。神社本庁教学研究所紀要, 3, 31-71.
- 谷治正孝(1999)：二百十日と風祭。地理, 44(9), 14-15.
- 柳田國男(1970)：御頭の木。『定本柳田國男集第二十二巻』筑摩書房, 242-261, (初出1931郷土1(3))
- 山折哲雄(1990)：神とはなにか。別冊太陽(平凡社), 68, 4-10.
- 八日市市大風啓発資料作成委員会(1995)：風の神さん風おくれ－八日市大風物語－。22p.
- 吉田郁生(1986)：越後の性神・風神その他。892p.
- 吉野正敏(1999)：風と人々。東京大学出版会, 220p.
- 和歌森太郎(1942)：八朔考。民間伝承, 8(4), 165-169.